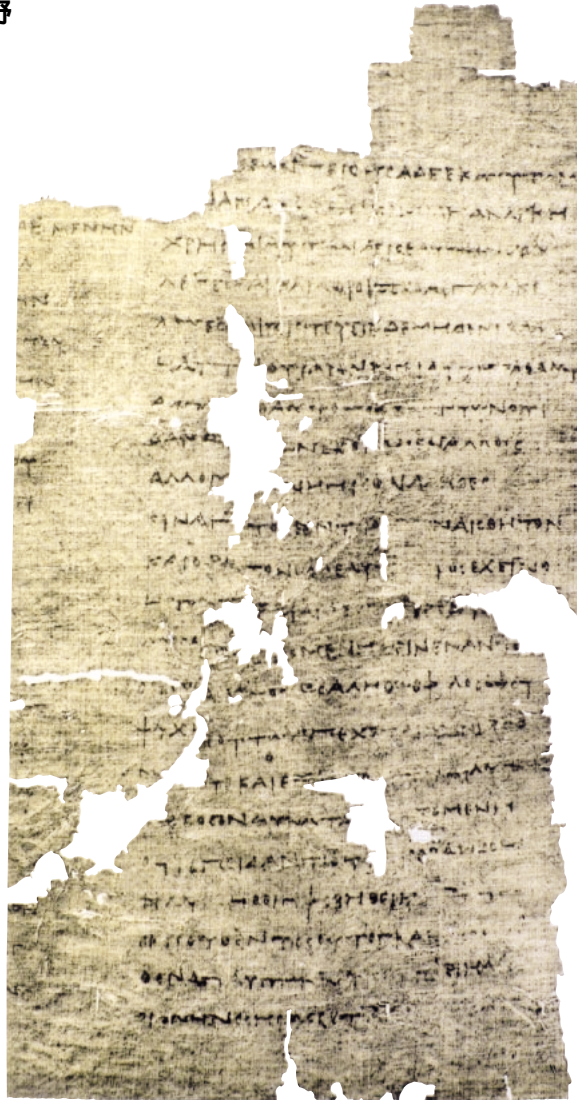


古典の写本 (1)西洋古典分野



古代ギリシアのパピロス文書/プラトン『パイドン』の一節(83A B)
[Flinders Petrie Papyrus/前3世紀初]

わずか数頁分ながら、『パイドン』をはじめとするプラトン(前427-347)のテキストを伝える最古の資料である。19世紀末に、ナイル・デルタ(エジプト)の町ファイウムのアルシノエで発掘された大量のパピロス文書中に含まれていた。発見者はエジプト学者フリンダース・ピートリー(Flinders Petrie)で、彼はツタンカーメンの遺跡発掘に加わったことでもよく知られている。プラトン没後数十年のうちに書写されたものだけに貴重視されるが、かなり粗雑な流布本の一部と見られ、校訂材料としては、今日のテキストの基礎となっている中世写本よりもむしろ信頼度は低い。前半部の読みを分綴して示せば(ほぼ)次のようである(〔 〕内は欠如部分)。

ΠΙΘΟΥΣΑ ΔΕ ΕΚ ΤΟΥΤΩΝ
[MEN] ΑΝΑ [ΧΩΡΕΙΝ ΟCΟΝ] ΜΗ ΑΝΑΓΚΗ
ΧΡΗCΘΑΙ ΑΥΤΗΝ ΔΕ ΕΙC ΕΑΥΤΗΝ [CΥΛ]
ΛΕΓΕCΘΑΙ ΚΑΙ ΑΘΡΟΙΖΕCΘΑΙ ΠΑΡΑΚΕ
ΛΕΥ[ΟΜΕΝΗ] ΠΙCΤΕΥΕΙΝ ΔΕ ΜΗΔΕΝΙ ΑΛΛΩΙ
Η ΑΥΤΗΙ ΟΤΙ ΝΟΗCΗ ΑΥΤΗ ΚΑΘ ΑΥΤΗΝ
ΑΥΤΟ ΚΑΘ ΑΥΤΟ ΤΙ ΤΩΝ ΟΝΤΩΝ ΟΤΙ
ΔΑΝ [ΔΙ] ΑΛΛΩΝ CΚΟΠΗΙ ΕΝ ΑΛΛΟΙC
ΑΛΛΟ Μ[ΗΔΕΝ] ΗΓΕΙCΘΑΙ ΑΛΗΘΕC
ΕΙΝΑΙ ΔΕ ΤΟ ΜΕΝ ΤΟΙΟΥΤΟΝ ΑΙCΘΗΤΟΝ
ΚΑΙ ΟΡΑΤΟΝ ΩΙ ΔΕ ΑΥ[ΤΗΝ Π] ΡΟCΕΧΕΙ ΝΟ
ΗΤΟΝ [ΤΕ ΚΑΙ ΑΙΔΕC] κτλ.

それらのものからは、行使の必要止むを得ざるものでないかぎり、身を遠ざけるよう言い聞かせ、魂がそれ自身のうちに凝集し一体化するべし、自分自身のほかにはいかなるものにも信をおくことなく、魂それ自身が自分自身だけで、存在するもののうちの何かそれ自体としてあるものとして直知したものを信するべし、そして他のものうちに現れた他なるものを他のものを介して考察したものについては、何らの真実もないと考えるべしと命ずる。そうしたものは感覚の対象となるものであり、目に見えるものであるが、魂が(?)注視するのは知性の対象となるものであり、目に見えないものである。

内山勝利(「西洋」分野責任者・京都大学)